第四章　内部暴力・リンチの発生と、黒聯、自聯の解散を要求した農青の「最近運動の組織並に形態に就ての一提案」

一　サンジカリズム排撃と都市アナキズム運動の衰退

八太の著述の多くは理論的な面、学究的な面を有しており、将来とも読者に魅力があるであろう。八太が多くの業績をのこしたことは評価するにやぶさかではない。幸い八太の遺著の多くは複刻され「無政府共産主義」の書名で、群馬、黒色戦線社から１９７１年に刊行されている。

しかし、その中に「サンジカリズムの検討」がおさめられていないのは遺憾である。これはアナキズム運動にとって逸してならぬ文献なので、本書前章末に資料（5）としてかかげた。

八太は同書序論の冒頭に於て「労働組合には、一面、労働者の利益擁護を目的として組織せられたものと、他面、共産主義の手先となって働くべく組織されたものとの二種あるのであるが、その何れにも属さないで、資本主義と真向から戦うことを主義としたものがサンジカリズムの組合だったのであるが、サンジカリズムの組合も、近時、次第にその旗色が曖昧となって、一方利益擁護の組合となるか、他方、共産主義に近づくか何れかに傾きつつある現状を呈して来た」と述べ、サンジカリズムの組合も無益であると主張した。

そして「ロシアのナバト・アナキストのごとく、かつてはサンジカリズムを戦術の中に加えていたのであるが１９２０年九月の大会で、サンジカリズムと別かれた如きは、その一例（アナキズムとサンジカリズムの分離）である」と述べた。

八太のこの論旨に従えば、労働組合は三つの型はあるが、どれもこれも駄目で、役に立たないと解するほかはない。

ついで、八太は論旨をすすめ「上記の労働運動の三様式は失敗の三典型であって、この類型が幾百年反覆されようとも、民衆は断じて解放されない。真の民衆の解放はかかる類型とは全く異った別種の運動によらねばならない。クロポトキンが新しい進路を暗示した所以も茲にある」。と述べている。そうであるとすれば、ちがった別種の運動とは何であるか。クロポトキンが暗示しているところの「新しい進路」とは何か。クロポトキンの「暗示といわれるものは、クロポトキンのどの著作中に示されているか――こうした、もっとも必要な点について八太は全く言及していない。これでは何のことか全くわからない。

それから、第三に、八太の「サンジカリズムの検討」には書かれていないが、日常闘争の問題がある。この用語は「サンジカリズムの検討」の増補改訂と称する、かれの「階級闘争説の誤謬」に於ては、つぎのように八太は述べている。「日常闘争とはいうまでもなく、労働組合を結成して、その団結力により、直接資本家と掛合うことを意味する…要するに労働組合の日常事項は資本主義組織内の商的行為であって、抗争でも闘争でもない」日常行為にすぎない。

こうした八太の福本イズムは、当時のアナキズム運動を風靡して、労働運動は方向を見失い、都市アナキズム運動の衰退はそこから始まった。八太の「サンジカリズムの検討」は、印刷工聯合や、全国自聯に拡大しつつあった労働組合主義（アナルコ・サンジカリズム）に対する抗争の理論的根拠をあたえると同時に、上述指摘したように、建設的運動理論を欠いたという根本的理由にもとづき、都市アナキズム運動衰退の素因をもたらしたことは、アナキズム運動史から決して削除することはできない。これによってアナキズム運動は方向を失った。共産党に於ける福本イズム（１９２５―１９２８）が果した役割とアナキズム運動に於て八太イズム（１９２７―１９３１）が果した役割は、性格も、時代も近似し、いろいろの点で共通している。

結局、八太が実践的革命運動家ではなかったところに、かれの理論が存在的アナキズムの源流となり、武装的観念論の本家となったということである。欠点（？）をマクロに拡大し、ミクロに追跡するだけでは決して実践運動は発展し得ない。八太に関しては短所と長所とを分別して吸収することが必要であろう。とに角、かくして自聯は分裂し、黒聯と癒着し、小さなセクトに落ちこみ、大衆運動の影は全く失われて行った。

二　サンジカリズム論争の「自聯」外への波及

すでに前章で触れたが、昭和三年１９２８三月の全国自聯第二回大会続行大会において、サンジカリズム派の大阪合成労働、江東自

由、東京食糧、東京一般江東、南葛両支部が全国自聯から除名（脱会）された。

これは重大なる事態であると言わねばならない。果して、杞憂されたとおり、五月には膝元の東印が分裂し、脱退組は東京印刷工聯合会を結成、そして前記の脱退組があつまって「関東自協」を結成したのは昭和四年１９２９で　これに関西、中部、新潟が参加し、日本自協を組成し、機関紙「労働者新聞」を発刊、昭和六年１９３１に組合の名称をもとに戻し「自協」に返ったことは既述した。

黒聯、自聯の関係が登場した序に、両者の関係如何について一言したい。昭和三年の既述継続大会で、中国自由聯合から「黒色青年聯盟に対する関係確立の件」なる提案があり、提案要旨は〝自聯と黒聯とは密接なる有機的関係にあるにもかかわらず、かかる提案を提出せしめる動機が存在する為である〟と趣旨説明があった。すでに、この種の問題は水沼辰夫の「関西の一同志へ」（資料7、第三章）１９２６に於ても中心課題となっていた。要するに、アナルコ・サンジカリズムの登場とともに自聯と黒聯（大正十五年１９２６一月三十一日成立）の蜜月的関係は変貌せざるを得なかったことは明白である。

大正十五年１９２６五月、機関紙「黒色青年」第二号の無署名論文「黒色行動と労働組合」（注55）を、茲で全文を掲載することは、有益であろうと思うので再掲する。

（注55）第三章、第二項「延島英一と「自由聯合」へのサンジカリズムの浸透」

この無署名論文は下記のように書かれている。「…われわれは日本に於ける革命の手段が労働組合を芯としたところの集団行動であらねばならぬことを信じている。われわれは過去の歴史に於てその実際を見、現在において、その結果を予想するときに、少数なる陰謀者のテロは、つねに失敗に終わることを思う。また、それとともに凡ゆる民族の自覚をまって為される大乗的革命の迂遠さに耐えきれない。搾取と支配を拒否して、自由と平等と富裕とを奪還することにおいて、その実際的なる役割のすべては生産労働者の負担であるといってよい。これらの意味において、日本の労働組合（自由聯合主義労働組合）は、日本の革命について革命をはたすべき主体であると信ずることは、決して独断ではない。

われわれは信ずる、かかる革命的な労働組合の地域的自由聯合、農村、工場、都市コンミューンがあらわれることによってのみ、日本における革命運動が実際的の圏内に入ることを。

われわれは、テロリストの行動が生む気運に推進さるべき主体が、つねにもうろう模糊であることを悲しむ。文化的無政府主義者亡び、労働組合は真に革命的なれ。われわれは革命における地域的コンミューンの建設と発展を祈る。

革命は工場より、鉱山より、農村より、街頭より勃発するものである。大胆に思想し、大胆に行動すべきである。

アナキズムの発展がつねに労働者、農民の日常闘争をつうじてであること、そしてアナキズムの高揚が、この実践における大胆な行動によってのみ達せられるべきであること、しかしてこのアナキズムの実践は、労働運動を芯としなければならぬ。」

右の論文がアナルコ・サンジカリズムであると断定すること自体にも問題があろう。アナルコ・サンジカリズムはアミアン綱領によって体系づけられた労働組合主義であって、右掲論文を直ちにそう規定するのは尚早を免れがたい。

いずれにせよ、自聯の分裂は、その後も波及し、関西黒旗聯盟の逸見吉三等はアナルコ・サンジカリズムの旗色を明らかにし、昭和四年1929、黒聯を脱退、昭和五年1930には関西、中国の黒聯は、別に「アナキスト青年聯盟」を結成、形勢は混沌としてきたということができる。自聯の分裂から黒聯の分裂に波及した、分裂現象は、この期には、さらに自聯外のアナ系諸団体に波及した。

たとえば、黒色戦線社（第一章、既述）内部に於ても昭和四年1929十、十一月にかけて、八太の「階級闘争説の誤謬」をテーマとする研究会に於て、塩長五郎、植田信夫、森辰之介等が批判され、十二月に至って丹沢明が同誌に執筆した社会時評がサンジカリズム的見解から一歩も出ないとして、粛正問題が発生、両者の間に思想的抗争がつづいた。

まず、黒色戦線社のサンジカリズム支持派の「声明書」を左に掲げよう。

〝吾等の雑誌「黒色戦線」は分裂した。この事実は、黒旗創刊に際し諸君に声明す、云々の「声明書」なるものが、諸君の手もとに配布されたことによって承知のことと思う。「黒色戦線」は分裂した。分裂の原因は、吾々が十月頃から持った研究会の論争に端を発している。即ち、この会合の当初、八太の「階級闘争説の誤謬」なるパンフレットが採りあげられた。吾々の第一回研究会は、その観念的自由聯合主義理論は誤謬なりとみとめた。しかるに、この八太式観念的自由聯合主義理論のガリガリの擁護者大塚貞三郎は、ことし、同志諸君！冷静に正確に「黒色戦線」分裂の真相を認識せよ。吾々は現在、他の同志達と「黒戦」発行の準備をすすめている。我々は正しい理論をこの新しい「黒戦」の上に展開して行くことの遠からざるを確信する〟（昭和四年1929十二月二十五日、「黒色戦線の分裂、解体につき全国の同志諸君に訴う！」筆者、塩長五郎）

容易ならぬと見て、陰険なる策動と、破康恥なる逆宣伝を初めた……かれ等はすでに彼等の声明書なるものを同志諸君に送った。しか

次に、このサンジカリズム派は、次のごとき第二次声明書を出した。

〝旧黒色戦線同人有志の十二月二十五日の声明書に明らかなる如く、一部の陋劣陰険なる策動によって「黒色戦線」は十二月号を期して遂に解体の止むなきに至った。だが、旧「黒色戦線」の同人の大部分は新な活動的多数の新同人を加えて、再建の陣容全く整い、より大衆的にして戦闘的な雑誌「黒戦」を親愛なる全国同志諸君の前に、二月号として、遅くも来月二十日頃までに送らんとしている。雑誌「黒戦」の発刊に際して、我等は従来の我国の自由聯合戦線を毒しきたれる観念理論を排棄し、自由聯合主義階級闘争に立脚して、実践的自由聯合主義の徹底普及を期せんとするものである。

雑誌「黒色戦線」は遺憾ながら同人雑誌形態から充分に脱却しきっていなかった。だが、今度、吾等の戦闘誌「黒戦」は断じて同人

雑誌ではない。全自由聯合主義労働者農民の階級的な大衆雑誌だ。数人の同人が頭から搾り出した観念的抽象論ではなく、全読者の、全労働者農民の実践的な行動、その闘争の中から産まれた詩、小説、評論、など真に戦闘的無産階級の芸術と思想で全誌面が埋められなければならない。それには全読者の共働が何よりも必要だ。俺達の「黒戦」はまだ産まれたばかりだ。これを真に戦闘的な大衆的なものに育て上げると否とは一に全読者諸君の能動的な共働如何にある。…第一号の締切は一月十日だ。

全国の同志、労働者諸君！1930年こそは自由聯合発展の年だ。文化戦線に於ても、この俺達の「黒戦」が充分に使命を果たし得べく、諸君の協力を衷心より望んで止まない。〟（「黒戦」創刊について全国の同志諸君に訴う……昭昭四年1929十二月二十五日・「黒戦」同人一同）

以上に対し黒色戦線のアナキズム自由聯合派は、〝「黒色戦線」は無政府主義文芸運動の一機関誌だった。僕等がこの雑誌を発行して行くうちに、思想的一致を欠くことがあった。僕等の中に階級闘争一点張りの論者がいたのだ。だが、僕等は彼等を克服し、清算した。このことは十二月号に発表した。しかし、それに続いて今度は、僕等が雑誌の態度を如何にして行くかという問題で二つにわかれた。一つは文芸によらずにもっと直接的な思想運動をやって行こうというのと、他は従来通り、文芸運動をやって行こうとの二つである。僕等はこの前者であって次の如く考えた。

僕等は社会の凡ゆる方面をアナキズムによって××し、建設しなければならない。芸術も社会の一方面である。即ち現在ブルジョア的思想或は国家的社会主義思想による芸術が横行している。これ等すべては私有財産と強権とを主張し、その間から生れたものに他ならない。これ等、芸術を破壊する芸術をアナキズムによって破壊し興生させなければならない。だが、芸術は――具体的に例をとろう。一篇の芸術理論は今日所謂文学青年とか文士とか言う芸術的才能を持つか、或は人一倍芸術を愛する人達の間には力強いかもしれないが、芸術を創作し、観賞するまでに富裕ではない一般民衆にはいささか遠いものであろう。僕等は此等常に搾取され、常に圧迫される貧乏なる一般民衆の睡っている欲求を自覚させ、その力を知らしめ、それに一つの力強い形をあたへなければならない。即ち民衆の間から生まれ、民衆と生命を共にして来た無政府共産主義者をはっきりと民衆の間に形態をとって植えるのでなければならない。しかも現在、民衆の間に天降って来る思想と行動とは何であろうか？教化総動員と言い、政治、集中経済、産業合理化、社会民主々義、マルクスレーニン主義、そしてその行動！　これら一連の思想と行動とは常に民衆を奴隷としようとする努力の表現である。何処でも自主自治の思想はその発達の萠芽さへふみにじられている。資本家とその政府、及び政党、無産政党の野郎共、マルクスレーニン主義の奴隷共が互に争いながらも、その行わんとする目的は民衆の圧迫、自主自治の撲滅、一片の自白を以て大部分の自由を刈取ろうとするワナ、要するにすべては民衆の奴隷化への狂奔熱狂なのだ。こんな時に如何にして芸術という廻りくどい、現在では民衆とやや

かけ離れた方面から僕等の思想を拡大しようしていられようか？　僕等は芸術運動の生やさしさに飽きたりなくなったのだ。もっと直接にぶっつかって行こうと考えたのだ。考えたことは行動に現わさなければならない。

その上、アナキズムの直接的な思想の宣伝はアナキズム芸術を衰微せしめるだろうか。否、何度でも否！　それは反ってアナキズム芸術をもっと明瞭にすることだ。これによって芸術に関心をもつすべての人達は必ず自らアナキズム芸術理論を形づくるであろうし、創作するであろうし、その立場から批判し観賞するであろう。それこそアナキズム芸術の輝かしい勝利への確実な一歩なのだ。

「黒色戦線」は二つに岐かれた。思想運動と芸術運動と。そして僕等はその考えを卒直に表現しようとして、新しい同志を迎えて「黒旗」を創刊した。僕等は単的に、卒直に、直接的に僕等の思想を書きたたきつけるだろう。そして僕等は芸術運動の生やさしい間からもっと外へ出ろと言う。僕等は出たんだ。

「黒旗」は勿論僕等だけの機関紙ではない。私有財産と強権とに反対する凡ての人達の、労働者、農民、その他一切の被圧迫民衆の機関誌だ。僕等は無政府共産主義を解放運動の基調として、僕等の運動を進めて行く。だからこれに同意する人達すべてに対して開放的だ。僕等は諸君と腕をくんで進みたい。この腕をより強く結び合うために、そして吾々の目的に到達するために、僕等は「黒旗」を押し立ててすすむものだ。〃（「黒旗」創刊に際し同志諸君に声明す、僕等は無政府主義戦闘誌「黒旗」を創刊した。昭和四年１９２９十二月十六日、黒旗発行＝黒色戦線社。筆者は相沢尚夫）

なお、自聯から除名された東京一般北部支部は「如何に日常闘争を重視せねばならぬか」のパンフを発行し、前記の「黒戦」を支持、自聯新聞を批難するキャンペンを行なうなど活動的であった。石川三四郎は「今日の世界の唯一の解放運動は非暴力個人的なアナルヒストとサンジカロ・アナルヒストである」と述べたとして攻撃（昭和五年１９３０三月）された。

昭和五年、アナキスト演劇活動（演出飯田豊二等）として「解放劇場」が誕生し、昭和六年１９３１二月築地小劇場に於て第一回公演「ボストン」（注55）を上演したが、劇団側のレポによれば、つねにふたつの難関、経済難と思想的不純物の雑居になやまされた。第二回公演の計画をなすにあたって、ただちに後者の問題が発生。サンジカリストの争議ハンスト応援の是非をめぐって幾人かの脱退者が劇団から出た。しかし、第二回公演として昭和七年１９３２二月、「クロンスタット」が築地小劇場上演で予定されている。しかし、「自由聯合新聞」によれば「クロンスタット」の上演は当局によって弾圧禁止された。同志、別所孝三によれば、「クロンスタット」禁止ののち、会場も日比谷の飛行会館で「ボストン」が上演され、かれは労働者ピエールを演じた。スト支援のために労働組合慰問の演劇も何回かおこなっている。

この解放劇場の稽古場にも黒聯一派があらわれ、たちまち稽古は中止され、一同は車坐にりな討論がはじまり、サンジカリズムが強

制的に排撃された。

（注55）第一回「解放劇場」のボストンは築地小劇場で上演され、八木秋子もサッコの妻ローザ・出演。

三　アナキズム戦線内に於けるリンチと内部暴力の発生

往時、アナキズムの陣営にいた者が、マルクス主義の流行とともに、マルクス主義に鞍替えし、そのために古い友人たちから制裁をうけた事例はあった。それはそれなりに、憎悪というよりは、お互の友情を捨てねばならないことを確認し合うためのドラマティクなものだった。

しかし、それとても、それは稀れであった。

だが、自聯と自協が分裂した頃をひとつの境として、反対意見に対する黒聯系のリンチ、暴力行為が多発し、それは永く持続し、憂うべき現象が発生した。

明らかに中央集権化したセクト行為で、こうした内部暴力とリンチの発生は、アナキズム運動史上の大汚点である。

しかし、恐らく、現在の人達には、内部暴力といっても理解が困難だろう（連合赤軍、その他セクトのリンチが類似していることは遺憾である。）。当面の命題であるサンジカリズムに対するものではないが、農青運動に対して宣告したもので、適例とは言いがたいが、参考資料にはなると思うので、農青に対して内部暴力の行使を宣言した「自由聯合新聞」（昭和七年１９３２一月、第六十六号）に掲載された「不純分子の徹底的掃蕩を期す」（上田彰）をひとつのモデルとして左にかかげる。

不純分子の徹底的掃蕩を期す　　―過誤を敢て為す者へ―　上田　彰

一、

良き方向をたどりつつある運動を、より深化し飛躍せしむるため、吾々は茲に実力の行使を強く主張するものである。

実力の行使、これは無政府主義運動の一重要素であって、今更ここに強調する必要のないものであるが、今日特にこの実力――無政府主義的暴力発動の必要を一方面に対して必然とされる秋である。

然し乍ら暴力の発動を解して直に爆弾を手に敵の城壁を襲うが如く思考する人もある。勿論、われわれとてそれを否定するものでない。それは運動の途上に於て当然為されねばならぬことであるが、茲に問題とする実力の発動とは運動の内部及びその近接に於て無政

府主義を装う不純分子に対する暴力の徹底的行使である。

勿論、運動は「暴力的」だけではない。「智力的」、「啓蒙的」、「暴力的」、この三要素は絶対に必要とするのである。吾々は吾々の運動の最後的決定的勝利をば決して「智力的」「啓蒙的」のみに依拠しない。「暴力的運動」この自由なる正確なる運動の進展だけが運動の勝利をもたらすものであると信ずる。

二、

即ち、われわれが茲に実力の行使を何処の方面に展開するかと言うに、支配階級の牙城に対しての暴力でなしに、無政府主義なる紛飾のもとに、非無政府主義的蠢動を敢て為しつつある、所謂名目論的アナキストに対しての暴力の行為である。

吾々は最近戦線の近接に幾多の無政府主義的なるデモ存在を目にする。そのデモ存在理由を一つ一つ挙げれば次の如き雑多なる種類のものを探し出すことができるだろう。

一、哲学的、観念的、形而上学的問題を、更に問題化し衒学的論理をもてあそぶもの。これは運動の進展の為めに何等の益なく、運動の実践を遙に遊離したる論理の遊戯でしか有り得ない。

一、運動の実際を認識し得ず、知っているかの如く認識不足のガリバン刷を配布して運動の過誤とかを高所より指摘する一派、二派。

一、無責任極まる戦線状勢の報告と煽動文書を発行し、身、自身は洞ケ峠に安閑と立籠り煽動の結果をフカンするスパイ的存在。

一、その他、名目論的、売名的、文学青年的雑多なる一群のヒトリヨガリ的存在及び曾て追放したるサンジカの残滓物等々である。

三、

尚おここに注意すべきは、これ等の無政府主義的連中のその何れもが曾て運動の実際に触れず、運動の歴史並びに現在の情勢に対して何等の実際的経験上の智識ない先生達であることである。

支配階級に対する闘争も勿論必要であるが、これ等の存在が戦線に注入する害毒を吾々は認めねばならぬ。さらばこれ等の不純分子に対し暴力的総攻撃の必要を認めるのである。

無政府主義を把握している者は戦線の動向に対して完全なる認識を持っているとは言えない。無政府主義を把握したる者、新たに無政府の陣営に投ぜんとする者はかかるバチルス的、スパイ的存在の無責任なる煽動に陥いらんとする危険のあるのを、吾々は知らねばならぬ。ある一派が配布したる信ずべからざる事実の下に書かれた文書は如何に地方の同志が苦難をもって築きつつある戦線を攪乱しつつあるか。

四、

また、ある一部の配布したる無責任極まる「××の完行」及び「地方情勢」が信ずるものにせよ、信ぜられぬものにせよ、そのスパ

イ的行為の影響が、如何にわれわれ及び地方同志の活動に支障を来たせしめたか。

支配階級に対する暴力のみが無政府主義の暴力ではない。

吾々はこれらの雑多なる存在に対して運動の暴力行為の必要を感ずるものである。「暴力的方法」を必要としないだろうか。過誤を敢て為す者に、今更、「智力的」「啓蒙的」でもあるまい。

エセ者の姑息的横行に対して、吾々は無政府主義の名誉のため断然たる態度に出ずるべきである」（注56）。

（注56）上田が指摘した農青出版物は、(イ)「最近運動の組織並に形態に関する一提案」、(ロ)「全国情勢報告」、(ハ)「吾国に於ける革命の完行について」等を指摘したものである。何れも資料として後出。このようなセクト化した状況下において、都市アナキズム運動の衰退は悲惨と言う他なく、自由聯合系労働組合運動も殆ど消失の一途をたどった。

四　結成主義からの離脱と黒聯、自聯の解散を要求した農青の「最近運動の組織並に形態に関する一提案」

こうしたアナキズム運動の衰退は、何人の眼にも疑う余地がなかった。

前にも触れたが、たしかに昭和五年１９３０期の「自由聯合新聞」（発行人梅本英三）は、毎号をあげて、農村恐慌の危機を告げ、「農民自由聯合」の発刊（二号で休刊）も試みたが、同年末、発行人が宮川章、昭和六年１９３１二月には大久保卯太郎にかわり、新聞そのものも低調をきわめた。

その間、昭和六年初頭１９３１に、自由聯合系最後の芝浦争議（注57）があったが、惨敗し、組合そのものも完全に瓦解し、全国自聯そのものも名目だけのものとなり、傘下の労働者は四散し、そのあとに黒聯一派が自聯に乗りこんで、きわめて少数の者の parti 化する状況であった。

（注57）芝浦争議の状況については、小野長五郎に関係があるため、第九章十二項の「愛知県に於ける農青アナキズム革命運動」の項を参照せよ。

大衆運動はすがたを消した。そして、ことばとしてだけの少数者の創造的暴力が護符のように繰返えされた。

農青運動は、第一章で既述したように、革命運動の具体的方法として、自給自足を中心とする経済的直接行動による全村運動の実践を提唱した。当然のことながら、少数者の創造的暴力でなく、民衆の創造的活動を主張した。そして、コンミュンの樹立、防衛のため

に民衆の創造的暴力が期待された。そして、個人や少数者でなく、全村協議会による全村運動、その終点として地理区画の意識的樹立を提唱した。こうした方法論は既成の少数者の創造的暴力主義とは、全く対立する理念であった。

一方では、実体として都市アナキズム運動は衰退し、そうした行詰まりをカバーするために中央集権化した反動的暴力の parti が都市に見られた。しかし、吾々が都市運動を無視したということは絶体にない。

だが、どうして都市運動は衰退したのであろうか。この点について吾々が到達した結論は、アナキズムの基本的理念である、個人の自主自治、これを動的にとらえた個人の自由活動――要するに各人の自主分散活動が退化した結果であるということである。自主分散と、個人個人の自主分散活動が後退したところに、結成主義が抬頭し行動を置き忘れた集合主義がアナキズム戦線に充満した。

このような検討の結果として、結成主義からの離脱と、集合主義の遺物である黒聯、自聯の解散をもとめた農青「最近運動の組織並に形態に関する一提案」（資料9）を、昭和六年１６３１八月、ガリ版で三百部をつくり、全国同志に配布した。吾々が、その際、留意したのは個々のアナキストの自主活動が失なわれ、その反射行動として結成主義の風潮が横行しつつある現状からは、革命は決して発生しないということである。

結成主義は、きわめて容易に組織に変貌し、組織は必ず創造的活動性を喪失した、結局は、中央集権化し、セクト化し、内部的に腐敗して、アナキズム運動は実質的に衰退するということである。吾々のこうした理念は、マラテスタの「無政府主義組織論」（資料10）と全く等しかった。

マラテスタの本書については、すでに充分知られており、解説を加える必要はないと思うが、日本無政府共産党は、逆に戦闘組織として昭和八年？１９３３頃、「組織」された。

ネストル・マフノの親友であったアルシノフが、１９２２年、伯林に亡命するや否や、在外ロシアアナキストグループを設立し、１９２５年、巴里に移ってから機関誌「ジェーロ・トゥルウダ」を発刊、１９２６年にはこのグループが政策と活動を調整する中央執行委員会をもつアナキスト総同盟の結成を提唱する組織綱領草案をこしらえた。これに賛成したのはマフノだけという状況下で、アルシノフは１９３０年にロシアに帰順（？）した。

マラテスタは偶然、この草案を入手して「無政府主義組織論」（資料10）を書いたことは、かれの冊子の冒頭に記されている。

マラテスタは１９３２年死去した。トゥルウダグループの草案は１９２６年に発表されたところをみると、マラテスタが「組織論」を書いたのは、この間であることは疑いない。吾々はいろいろのことを見てきた。たとえば、スペインに於ては革命政府に参加、入閣したほうが、アナキズム運動の展開に有利であると考えて政府に入閣した少数のアナキストもいた。しかし、すぐ誤謬に気づいて内閣

から去った。中国に於ける北京アナキスト聯盟の景梅九の蔣政権参加、李石曾、沈仲九、蔡培等の消極的国民党参加（一九二十年代）もそうした誤謬の一例であろう。ソ連に於ても同様な例（シャトフ、サンドミルスキー、ロジャーエフ等）は少くなく、ことにアナルコ・サンジカリストの共産党入党者は多数であり、アナルコ・ボルシェヴィキ、ソヴェトアナキストと呼ばれたが、こうした原因は、要するに、かれ等がアナキズム革命の実践的方法論を欠く結果である。アナキズムの方法論は、端的には、後述するようにコンミュン（地理区画）を形成し、情勢の動向とともにパルチザン的に社会建設に結集すべきである。（昭和三年１９２８、筆者も中国江湾に在住、中国アナキズム運動の前記の部分的状況を知り得た。）

マラテスタは右の「組織論」の中で、「今日、社会変革の大きな力は労働運動（労働組合運動）と共にあり、今日に於ては、次の革命によって行なわれる事件と、究極目的の進むべき進路はこの運動の方向如何に関すること多大である……無政府主義者は労働組合運動の有効なること、重要なることを認め……無政府主義者は、その労働組合の行動の原動力とならねばならない（以下略）」。のように労働組合とアナキズム革命の関連について、かれはきわめて長文に亘る意見をまとめて述べており、マラテスタが他の機会に於て述べたことを集大成している。序ながらマラテスタの説は一見サンジカリズムに類似して見えるが、サンジカリズムはアミアン綱領を芯とする運動であるが、マラテスタの場合は、アナキストを中心とする組合運動である点で、実体としては対立的である。

なお、マラテスタが、この組織論を書いた昭和五、六年頃１９３０～１９３１、吾々はマラテスタの方式と異って、農村中心の革命運動を行なったことは、すでに第一章、第二章等に於て詳述した。多分、かれはスペインにも、ソヴェトに於ける状況にも、自由を奪われつづけたかれには深く知り得なかったであろう。

なお、「最近運動の組織並に形態に関する提案」は、パンと自由社発行となっているが、小野（長）のアドレスを利用、農青社の出版である。

五　「農村青年社事件」と結社加入問題

農村青年社事件は前にも多少触れたし、後章でも扱うが、かなりの検挙者を出した。検事局の発表では三百六十名内外とされている。結成主義を否定し、中央的組織を拒否し、自主分散活動に徹した農青運動が、いかなる理由で、治安維持法上の結社として構成されるに至ったが、その次第は多くの人が理解しがたかったのではないか。

「農青イズムはアナキズムとしても、極めて特異な理論的存在で、その自主自治、自給自足を内包する村落体の自由聯合を革命の基礎とするもので、マルクス主義運動の昂揚期に、これだけの支持者を獲得したのであるから、その動向は重視すべきである」（西広長野県警察部長）

「何分にもアナ系のこの大事件は、これがはじめてで全国にも例がなく……法の適用にあたっても、アナキストの思想から言えば、結社の強制力など認めず、従って非合法結社の実体が、共産党のようにはっきりせず、農青加入の問題もきわめてあいまいで、この点治安維持法の適用上、かなりの苦心をした。結局、結社に加入した形式はとっていなくても、実際に農青イズムに従って運動を行なっているものは組織に加入しているものと認定して起訴するほかはなかった。」（長野検事局思想主任黒沢検事）

以上述べた警察、検事局に対し裁判所はつぎのような見解を示した。

「農村青年社の組織に加入する手続、決定せられたる規約等はアナキズムの本質上ない。よって農青社の構成員たるには、先ず原則としてアナキスたることを前提とし、

1　黒聯、自聯の支持者ならざること

2　機関紙農村青年、並に農村青年社発行のパンフレットを送付され拒まざること

3　機関紙農村青年その他農青社のパンフレットの送付を要求し来れるもの

4　通信により連絡、農青社の方針に従い活動するもの

5　直接連絡により活動的なりと認むる者

6　地方の出来事に対し実際に農青社方針による行動を執りたるもの

右の内1、2、3の経過を確認し、4、5、6の条件の加わりたる者は農青社の組織に加入せる者と認むべきなり。勿論、農青社の分散組織は全く自由合意の結合なる故、加入を強制する要もなく、自ら農村の解放を自己の任務として感じ、アナキストが農青社の方針により、緊密に結ばれたる事実があれば、それは等しく農青社の構成員と認める」（長野地方裁判所刑事部中村泰蔵裁判長、昭和十二年四月十二日判決）要するに加入不加入は、本人の意志とは全く独立に「認定」によって決定された。そしてここにかかげたような方法で、多くの同志が検挙され、三十六名の同志が起訴されたのである。

しかし、多くの同志の起訴は、法条よりも、言うまでもないことながら、背後に急迫した帝国主義的侵略戦争の国家的要請によってでっちあげられたものであることは多言を要さない。